

リ」であり、子としては芽で凸で、右目で、「ミギリ」である。

古典に、八雷神と傳へたのは、子としての「メ」で、豫母都志許賣と呼ぶ。黄泉津大神と傳へたのは、母としての「メ」で、亦等しく豫母都志許賣にいたします。別れては、母と子であるが、共に「メ」である。

此の「メ」と、彼の「メ」との偶ひては別れ、別れてはまた偶ふ。過去の過去際より、未來の未來際に彌りて、止む時無く、息む時無く、運り行くのである。

古老教へて云はく、

くすしかも、あやしきかもな。あめつちの、ありのことごと。ものみなは、ここにむすびて、そこにとけ、そこにとけては、またむすぶ。そこにわかれて、ここにあひ。ここにあひては、またわかる。わかれつ、あひつ。とけつ、むすびつ。ゆきつ、かへりつ。まがたまの、いほつみすまる。くしみたま、くすしかしこし。さきみたま、さきくまさきく。やさかにの、ふゆをこそませ。かくりよの、さちをこそませ。なきひとの、みたまみし。いまみしかみ。たまほこもちて、いまぞきませる。たましひもちて、いにますみたま。いうをえあ。

と。

その「ミタマ」は、「都夫多都御魂」であり、「阿和佐久御魂」であり、「底度久御魂」であり、猿田毘古神の御魂である。

「猿田毘古神の御魂」の神傳が存るので、私どもは、死者を齋るに、「水」を以つてすることを知り得たのである。天の「ミヅ」と地の「ミヅ」とを合せて、「麗はしき壯夫」を造り成す道を悟り得たのである。「大穴牟遲神

ミツマ

⑤

ミツマ
御霊

⑤

ミツマ
御魂

⑦

(直日)

ミツマ
身魂

コトアマツカミ

アマツカミ

クニツカミ

マカミ
「魂の神」
5音1語

ミカミ
「身の神」
4音1語

ミカミ
「身魂の神」
3音1語

ヒ
カミ

ヒ
零の作用
ミヅ

別れ
つ

解け
つ

往き
つ

合ひ
つ

結ぶ
つ

返り
つ

ミヅカキ

ミヅとして
循環
(幸. 205)

ミイツ 循環図

同じ「ミツ」を、陽と云は「火」と称し、陰と云は「水」と称する。

無宇宙

宇宙

ノホルミを
「火」と称する。

ノザルミを
「水」と称する。

トヨノミモヒを
奉る。

アマノマナサの
ミモヒを汲み。

人間

(ヨモツウニ)

(ナカツウニ)

(ヨモツウニ)

(幸.136)

ミンスビノカミ

無宇宙

ミヅ、経テとしては綾威
緯ヨとしては水

共に三産霊神

ミヅが
場所

(上)

ノ
ホル
モ
ノウ
ダル
モ
ノ

(水)

(地^ノのミヅ)
から(天^ノのミヅ)
からあくまで
旧約聖書の用語

宇宙

ミヅ は コトマ であり、霊的な実体の名称だが、
ここで言う「火」や「水」はただの呼び名である。

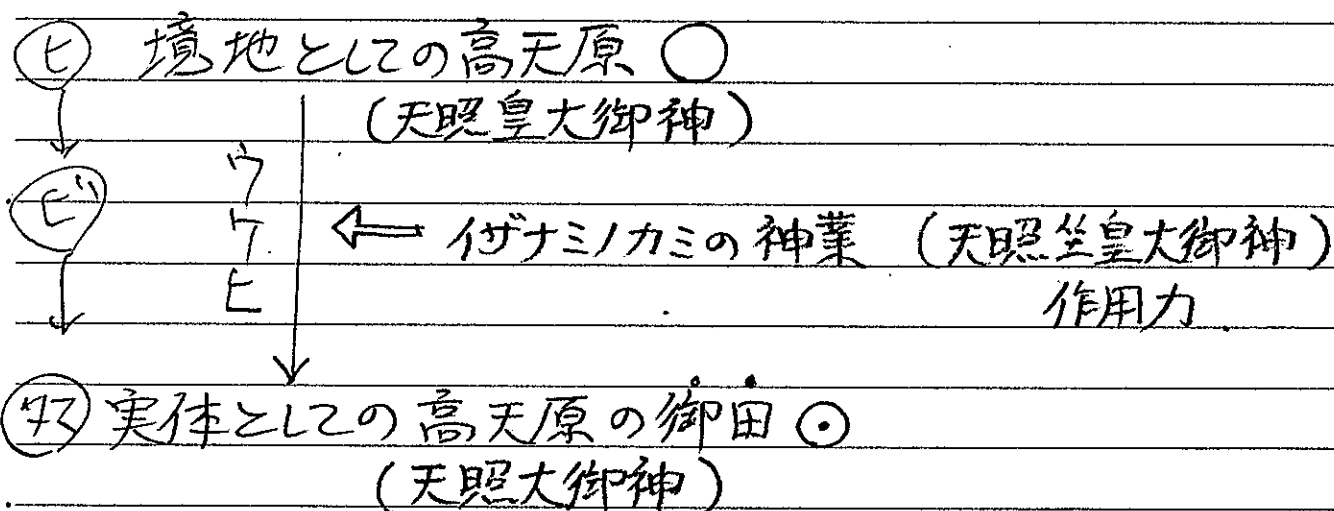
ノホルモノ …… 「本質的に昇り続けるモノ」という意味ではなく

循環するミヅの^a上昇局面^aを指して

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ …… 上記と同様

人間身として、無宇宙と理解するための順序 (時系列ではない!)



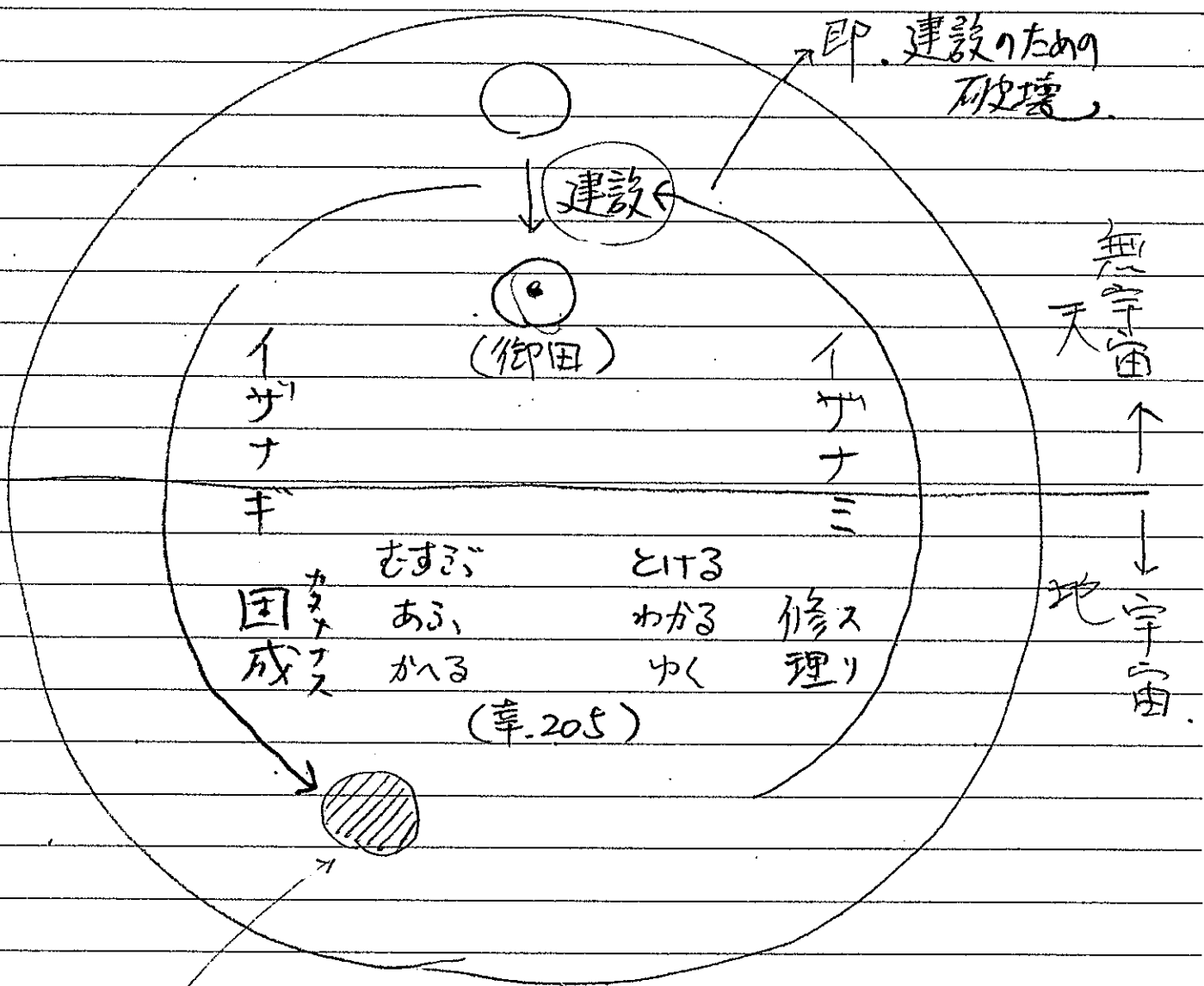
イムスヒ + タルムスヒ → タマツメムスヒ 産霊ムスヒ
 イムスヒ" + タルムスヒ" → タマツメムスヒ" 産魂ムスヒ"
 イクタマ + タルタマ → タマトマルタマ (種子)カ

「九魂絶一」の「カ」も実数と言うより、数理。

「ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コ」で「トラ」となるの意味。

○^ヒは 零としてのー^ヒ だが、

⊙^{トラ}は 十としてのー^ヒ (→御田) +

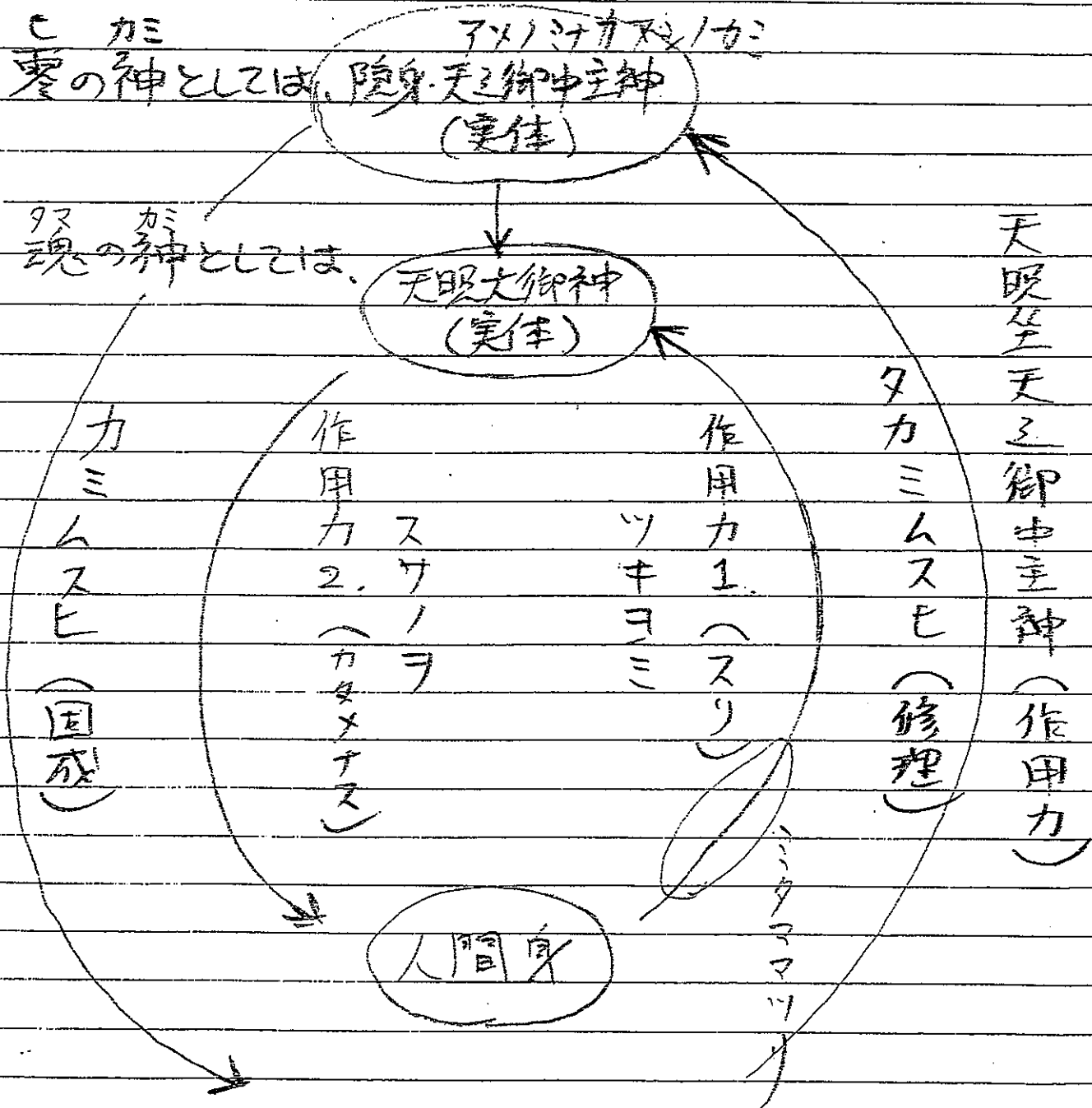


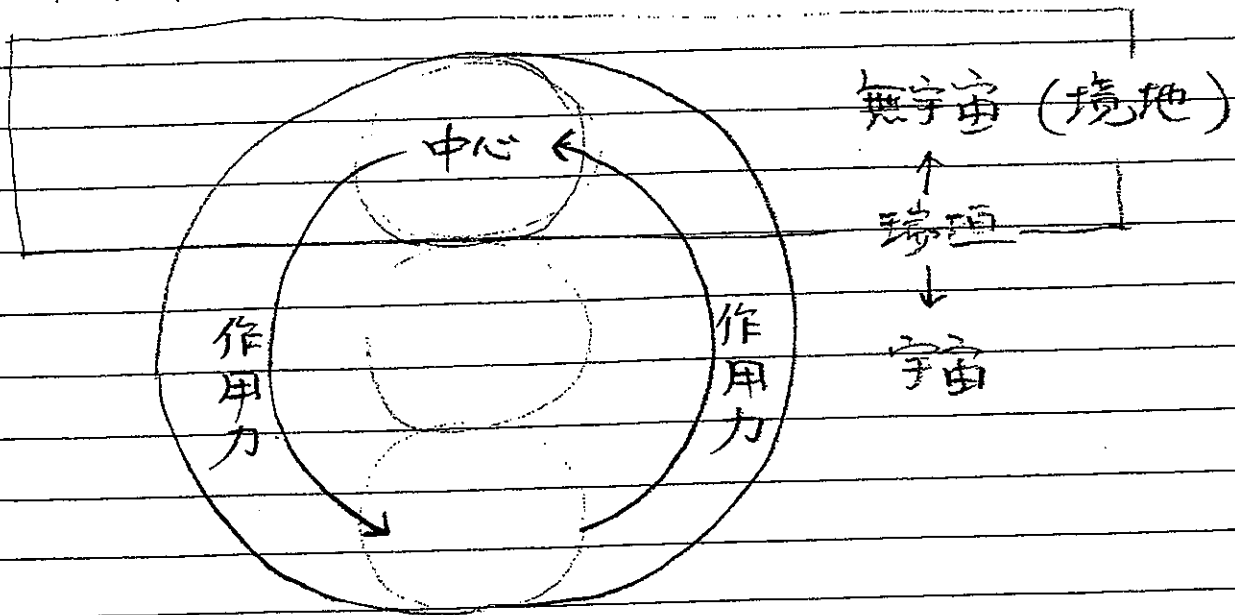
イザナギノカミの神業の成り成りたる時

「天地は存在の尽 統一りにたる」といふ状況

アハツク アリ エトゴト ミスミ

未来250頁、参照





④ こうしたつながり (天照全 天御中主神の御徳)

これ自体を表現したコトワマが

「アソバカスヤヅ サカラカスヤヅ ア4メ」である。

おそらく、このコトワマは「神界の築成に努める」とか、

「神界の完成を喜ぶ」とかではなく、

上記のような「中心からの、また中心への 作用力」

そのものを表現したものであろう。

< 'ヒ' の存在様式の三段階 まとめ >

() 内は「言霊の幸」の頁数 () 内は「修験講義録」の頁数

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの ○ ^ヒ 内在する作用力と
^ヒ 純一不可分の零 (90) 純一不可分の零 (80) ^ヒ ヒカリと称する。
 これら { ^{ミムスヒ} 三産零 (^{イウムスヒ} 生産零 ^{タルムスヒ} 足産零 ^{タマツメムスヒ} 玉積産零)
^ミ 実としての御零 (以上 130) } その活用は順次
 より下の段階へと
 作用し、最終的に
 宇宙の側にまで至る

これが ↓ ^{ムスビムスビ} 産零産魂て

2. ○ と ○ との複合体 ^ミ ⊙ (136) ^フ ⊕ (68) ^{カミ} ⊗ (72) ^{ヒカリ}
^ヒ { ^{タマノヲ} 経と續 ^{ミヅホ} 男と女 ^{イノナ} 凸と凹と (91) ^ラ 千變万化する靈魂「^ミヒの活用」(89)
^{ミムスビ} 三産魂 (^{イウムスビ} 生魂 ^{タルムスビ} 足魂 ^{タマツメムスビ} 玉留魂)
^ミ 身としての御魂 (以上 130) } ^ミ 三不可分の魂 (80) ^{ヒカリ}

その種子が ↓ 芽をだすと (84)

3. 體としての成立 ^ミ ⊙ ^ヒ ⊕ ^ヒ ⊗ (36) ^{ナヲ} ⊕ ^ヒ ⊗ (78.末)
 { ^{タテ} 経と續との相交わりたるもの (91) ^ヒ ヒツ
^ミ 不^ミ一不^ミ二不^ミ三の玉 (^{イウタマ} 生玉 ^{タルタマ} 足玉 ^{タマツメタマ} 玉留玉) (80)
 人間身の上では 根本魂 ^{ナホヒ} 直日 (132)
 これも、しばしば ^ミ 御魂 と称する。

無宇宙

チチハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。

□古にして□□十にして㊦にして凝固の形象なり。

而して結實なり、結晶なり。

産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。

十なる□の蒐集したる□なる

固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團

結體を指事したるなり。

之れを見なり子なり孩なりとなす。

兒は儿なる人の宿るところにして言なり。

子はかがまりたる人なり。

他に依據するものなり。

孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみな

りとの義なり。

常陸國に小田と北條との二村有り。

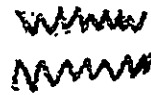
鎌倉時代より今に至るまで相聞ぎ相争ふて止まず。

北條の水を小田に分たず。

小田、之れが爲に耕耘にたへず。

仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れをハハと云ふ。

母胎に住み母血を吸ひ母乳を

呑み、母を食料として生活せる

もの即、孩なり。

而して母は之れを喜び、之れを愛撫し、之れを養育す。

これをマンコと云ふ。

七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。

之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。

あちめあちめあちめあちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ。

ちちははみおやみおやみなとものにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。

おおおおおおおおおお。ああひがてんじんゆうあいこ。

^ヒ零(一)に内在する原理として、^{ヒツミ}一ニ三があるように、

^{ヒツヤ}空零(六)に内在する性質として六七八がある。と考えて良い。

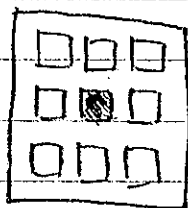
○ヒが二重相としては①であるが故に、

それは①となり、^ヒ零の自己組織化が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測のメとなる。

母としてのメと子としてのメの離合集散により、また

筒体か成立する。これが ^{ヒツミ}と描く「七の妙用」である。
(九)



(九→十)

九は中心(一)と外部(八)

これを一つにまとめて十とする。

図表1. 古事記登場順の神名表

No.			
1	天之御中主神	↑ コ ト ア マ ツ カ ミ ↓	アマノミナカヌシノ オホミカミは、 こちら側に重点を 置いた神名。 ビ
2	高御産巢日神		
3	神産巢日神		
4	宇摩志阿斯訶備比古遲神		
5	天之常立神		
6	国之常立神		
7	豊雲野神		
8	宇比地邇神	↑ ア マ ツ カ ミ ↓	イザナギノオホミカミ は、この十柱神に 重点を置いた神名。
9	須比智邇神		
10	角杵神		
11	治杵神		
12	意富斗能地神		
13	大斗乃辨神		
14	於母陀流神		
15	阿夜訶志古泥神		
16	伊邪那岐神		
17	伊邪那美神		
18	伊邪那岐命	↑ ウ ニ ツ カ ミ ↓	(二柱御祖神)
19	伊邪那美命		
20	大事忍男神		
く			
59	豊宇氣毘売神		No.20~59.の40神は、 「神生み」で生まれた神々。

	7 領域	(未来250頁より) 「一貫したるカミ」	古事記の神名
無宇宙の3段階	① ヒの段階	(零の神としては) 隠身天と御中主神 (タカミムス⑤ノカミ カミムス⑤ノカミ)	(左記.造化參神)
	② ビの段階	イザナギノオホミカミの オホミマノハラへにより、 カウリミから ウツシオミに変化。	ウマシアシカ⑤ヒコダノカミ 他.三神
	③ タマの段階	(零の神としての) 三貴子	十柱神 (イザナギ・イザナミ.他) 三貴子 (←オホミマノハラへ) 五男神三女神 (←ウケヒ)
ミヅガキ 瑞垣 宇宙の4階層	① 第一階層	(魂の神としては) 天照太御神 (ツキヨミノミコト タケハヤスサノヲノミコト)	イザナギノミコト・イザナミノミコト 国生み・神生みによる 十四島・三十五神
	② 第二階層	(身の神としては) 皇御孫之命 (イハナガヒメ コノハナサウヤビメ)	(個々の土地における 具体的な鎮守神・産土神) 他.アメノワカヒコ.など。
	③ 第三階層	(人類世界の神としては) オホヤマトスメラギミ (アシハラシコヲ ヤヘコトシロヌシ)	(オホウニヌシノカミや サダビコノカミは.一旦、 ここまゝ降りて来ている。)
	④ 第四階層	(人間身としての天皇)	

多田流の用語と 古事記神話の解釈	神の類別	月神事 幸19頁 他より	備考
・コトアマツカミの領域 ヒノカミ カミヤ バウガウエン ・火神の神宮 (莫囂圓)	ヒ カミ 零の神	ヒ (零)	ヒ 零 ↓
・境地としての天照皇大御神 アマテラスメオホミカミ	(カウリミ コトアマツカミ	ミムスヒ 三産靈 (ミタマ 御靈)	↓ ・結ばざる タマノヲ
----- アマノイハヤト ----- ・オホミマノハラへの神話 ・ウケヒの神話	(ウツシオミ アマツカミ ミツガキ 瑞垣)	第一魂 根本魂 直日 (ニギミタマ (知魂))	↓ ・結び結びたる タマノヲ
----- アマノウキハシ ----- ・勝さびの神話 ・五穀の起源の神話	タマ カミ 魂の神 タマガキ 玉垣	第二魂 靈 (ウシミタマ (奇身魂))	↓ これらがそのまま 宇宙の素材領域 (ヨモツクニ) に 入ると、各々、
----- スガノミヤ ----- ・ヲロチ退治の神話 ・国譲りの神話	ミ カミ 身の神 ナカガキ 中垣	第三魂 念 (サキミタマ (幸身魂))	・空零 ・鬼神 ・魂魄 などと呼ばれる。
(出雲神話の前半部)	ミタマ カミ 身魂の神 アラガキ 荒垣	思考 マミタマ (真身魂)	即ち、総じて マガツビの類 である。
	ヒ カミ 人の神	身体 アラミタマ (荒身魂)	

物には無いとか有機体と無機体とは異るとか峻別し主観の有る者と無い者と區別して取扱はうとするかも知れぬ。けれどもそれは自己の省察が足らず他を觀察する途を忘れて居る為である。

古典を解くには、

第一に、大宇宙の唯一であることを知らねばならぬ。

第二は、唯一つである大宇宙はそのまま万有であることを知らねばならぬ。

第三には、唯一つであり万有であるものは唯一筋の真理で貫かれて居ることを知らねばならぬ。

第四には、以上の故に一塊の土にも一滴の水にも一抹の雲にも一陣の風にも一閃の光にも一管の音にも一葉の草にも一点の塵にも大宇宙の事理は具はつて居ることが判らねばならぬ。

第五には、事実で真理である唯一の道とは極大で極小で大平等であることを知らねばならぬ。

第六には、大平等であるのに其の万有がその中に在つて相互の対立を認めるのは個個の結晶が異なる為であることを知らねばならぬ。

第七には、万有はその結晶が異なる為に牆壁を高くし境界を固くして居るがそれを取り除きさへすれば一円光明の身と成るべき理を知らねばならぬ。

第八には、牆壁境界を撤したる人の身は人の身ながら「カミ」と称すべきことを知らねばならぬ。

第九には、人の身としての神は神代の神と不二であることを悟らねばならぬ。

第十、唯一つなる大宇宙とは零なる一であるから万有はそれを種子とするのである。

第十一、宇宙万有は総べて主観すると共に他を客観し他より客観せらるると共に自らは主観して居るので主観

中に客観が有り客観中に主観が有る。相互に観門を開いては相互観をする。裏からも観れば表からも観る。総合しても観れば分解しても観る。自他を総べても観れば箇箇分分を箇箇分分のままに表裏主客観をもする。その観門は多角多面重重又重重百八観千八百八万八億無数観が行はれる。そこで唯一つの大宇宙ではあるが、

「客観しては高天原で○^ヒであり」

「主観しては神で○^{ヒカリ}であり」

「主客合観しては神漏岐神漏美二柱皇親命にてまします。」

「高天原^爾神留坐」とあるが

対立的境涯に出頭没頭しつつある人類を対象として分り易からしむる為に「神留坐」と書かれたのである。

「カムツマリマス」とか「カムツマリイマシマス」とか読むので其の「ツマリ」とは充塞の義で「タカマノハラ」それ自躰が然うだと云ふに等しい。それで客観しては「タカマノハラ」であるが主観しては「カミ」でその「カミ」は一神で万神である。

人はそれを人としての機能相応に拝むより外は無いから種種様様の名称で讃めたり貶したり勝手なことをして居る。従つて自分等人類の祖先を「カミ」と拝むものと乃至「微生物」だと論断するものと実に多種多様である。此の祝詞には唯一の高天原が「カムロギ・カムロミ」二柱の皇親であることを伝へて居る。

「皇親神漏岐神漏美^乃命以^氏」とある神漏岐神漏美二柱皇親命を古事記には伊邪那岐命伊邪那美命二柱神とも高御産巢日神神産巢日神二柱御祖命とも伝へられてある。まるで別なやうな御名を同じ神の亦の御名だと申しますのは此の神が共に等しく宇宙万有産出の祖神にてましますが故である。その御名の異なるのは之を拝む人の異なるが故であり或は時を異にするが故であり亦は処を異にするが為である。それは単に日本古典の上のみではなく各

各国各地の古典に通じて認めらるるところである。

「宇宙万有産出の祖神は對待を絶して居ること固よりであるから時間に拘はらず空間に限られざる唯一超絶の神にてましますのである。それで古事記は「隱身」とか「独神」とか「別天神」とか記し、極大で極小で極で無極で「零」であることを明にしてある。零とは大平等であるが人は其の中に自己なる一点を認めて其処に「カミ」を拝む。故に此の神は既に零ではない。隱身でも独神でも別天神でもない。相對の妙用妙象を現はされたのである。ではを御声として拝めば「カムロギ・カムロミ」であり御象として仰げば「伊邪那岐・伊邪那美」であり数として算めば「〇^{ヒト}」で⊕で十字架で十^{カミ}である。」

此の「カミ」とは一であると共に二でまた三で五で十で百千万無量である。一としては天之御中主神で二としては高御産巢日神神産巢日神で三としては天之御中主神高御産巢日神神産巢日神で五としては天之御中主神高御産日神神産巢日神宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神で十としては宇比地邇神須比智邇神角杵神活杵神意富斗能地神大斗乃弁神淤母陀琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神で百千万無量としては百八百万天津神国津神と称へまつることを古事記は伝へてある。なほ日本書紀旧事本紀祝詞式等と対読すれば一層明瞭になるし他国他民族の伝へた古典をも併せて見るならば更に良いのであるが今は成るべく煩を避けて古事記だけに止めたい。

さてこの大宇宙たる高天原は超絶零界であるがその御活用を仰ぎまつれば神漏岐・神漏美として万有を發現するので之を皇親と讀へまつる。その皇親とは「スメモツ」であり「スメラガムツ」であり「スメラガムツミマスナル」であり「スメモヤ」である。「スメモヤ」としては皇祖である。けれども皇祖とは等しくして僅に異なる。「祖」とは「ミオヤ」であるが「親」は更にその御活用を示して相和ぎ相親しみ相睦み相誘ひ相合ひ相交はるの義

であるから「カムロギ」であり「カムロミ」であり「カムルミカムルギ」である。
名詞 動詞 駄言でもあり活用語でもあり其の時と其の人と其の処と其の祭典の目的とに相應して變化するのである。

天之御中主神と称へまつるのみでは一切を包括し給ふ御名であるが其の御活用を仰げば高御産巢日神神産巢日神にてましますからそれを祖神としては神漏岐神漏美とも伊邪那岐伊邪那美とも称へて皇祖で皇親で「皇親大倭須米良岐美」で「吾大伎美」で「伎美」にてましますのである。之を支那人は陰陽と呼びまた乾坤とも称へ近く身に取りては男女と云つて居る。日本人は敬虔の念から「加微」と称へ支那人は不可測だからとて「神」と呼び陰陽だと云つたまでの異別なので共に「祖」で「親」で「ミオヤ」で「オヤ」である。

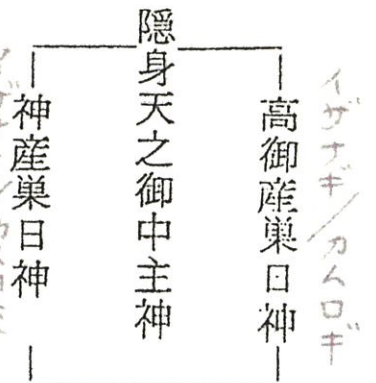
その「ミオヤ」の「ミイノチ」の変幻出没が人であり物であるからとて「天命」とか「命」とか書き天神の詔命なればとて「ミコト」と称へ「ミコトノリ」と仰ぎ「オホセ」なりと畏みまつるのである。

此の御声として拝む神漏岐神漏美の妙用を高天原にては「男建」と呼び「雄詔」とも称へて大宇宙の勅命則

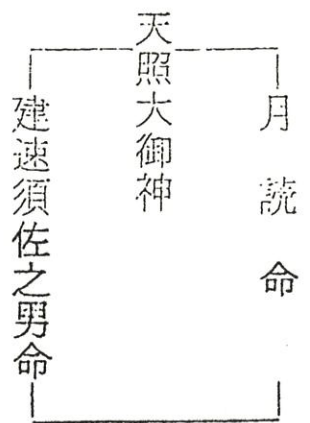
別天神の命で古事記に所云の「天神諸命」である。そこで神漏岐神漏美として男建び雄詔ぶ大宇宙の神勅のままに皇親の神には百八百万と在る限りの神を神ながらにお集め遊ばされてその神道を神の遮爾遮爾神顯し各自各自の神性を發揮させようとして神ながらにお譲り遊ばされお諭し遊ばされお教へ遊ばされお導き遊ばされた。その結果として八百万神は皆悉宇宙の事理を明にしたのである。之を人間的に観て現今の詞で言ふならば「正しき与

論」を作られたので茲に其の真理のままなる国を建てさせ給ふとて先其の中心の超絶性をお示し遊ばされたのである。則国家機構の中心は唯一超絶神にてましまし日本民族は之を皇御孫之命と讃へまつり仰ぎまつるのである。

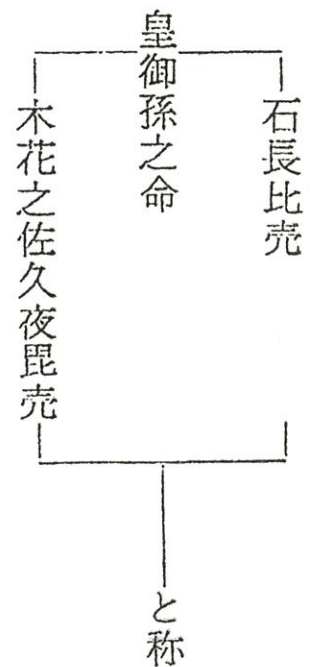
はてしと神の零



はてしと神の魂



はてしと神の身



の神としては

大國主の別名

葦原醜男

意富耶馬台須米良岐美——と称へまつるのである。

八重事代主

大國主の息子

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し、「人類世界の中心」として機能することによって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも行使できるようになるのである。

ところがその国は本来神魔包括の〇の神であるから時あつては神とも成り魔とも変わるので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五官的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神を

阿那畏。

平定する修理の諸力。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承しまつる。

人間世界の支配者として現れ、その力を以て人間世界の平和を維持する。之を救として現れ

ば零の内容が二であり三であり四五六七八九であり然うして一であり十であるが為に其の一二三四五六七八九の加減乗除が美とも醜とも善惡とも正邪曲直とも變化し治乱興廢ともなるのである。之を換言すれば善惡も美醜も正邪曲直等も「我」の外なるものではないのである。此の「我」を古聖は「如来」と呼ばれた。そこで

「如此依志奉志国中爾荒振神等乎婆神問志問志賜神掃掃賜比氏語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止氏天磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏天降依志奉伎。」

と、高天原なる皇親の命には人の国を神の国と築き成されて建国の天道をお示し遊ばされたのである。此處で注意すべきことは「天磐座・天降」の文である。「天磐座」は○界であるから説明語の用ゐやうが無い。けれども此處に用ゐた文字に従つて堅固の意とするならば堅固になること此の上も無い。が此の「磐」は「イハサカ」の「イハ」と等しく正しく発き升る義を表したのである。それ故に人間から仰げば「天降る」であらうが「高御座」たる「天磐座」の御光は十方に等しく発くので「正しく升る」ので方位に拘はるのではない。十表に雄走る稜カミノミツ威である。神代に於ては之を「稜威雄走神」と称へまつる。その雄走が発き発くのであるから茲に「天磐座放」とある「放」は「從」の誤りである。若しも「放」とするならば下降転落で不祥の語となる。天之磐座を放れずして天降りしますが故に神位なのである。此の神位を高御座として国土を経綸し給ふが故に重重無尽の円光として万世一系にましますのである。

既に述べたる如く中心は唯一超絶の零神ヒツカミでそれが高天原にては皇親神漏岐神漏美命と仰ぎまつられ神国淨地を築きては皇御孫之命と讃へまつらるるのである。然うして皇親の神には建国の大本をお示し遊ばさるると与に惡神邪鬼をば教へ諭して其禍マガを掃ひ清め草木の一葉までも乱れ擾ぐこと勿らしめてさて高天原なる神座より神代の

の勅命のままに猛然踊躍してお降り遊ばされたのである。

往くか返るか来るか去るか。窮め来れば唯は一点である。之を古老は「高天原」だと教へさせられた。斯くして此処に此のまま高天原は成り成る。

「如此久依^{左志}奉^志四方之国中斗大倭日高見之国^乎安国^止定奉^氏下津磐根^爾宮柱太敷立高天原^爾千木高知^氏白御孫之命乃美頭乃御舍仕奉^氏天之御蔭日之御蔭止隱坐^氏安国^止平氣久所知食^武。」

之を第三段とする。第一段では中心としての皇御孫之命とその外廓たる八百万神との関係を教へて先其の中心の確立と外廓の統一とを命ぜられ第二段では外廓の分裂と統一と其の結果とを明にせられ「天之磐座」のそのまなる神国浄地を人間世界に築き成したる暁を第三段に詳述せられたのである。

宇宙の側の話

末

252

その神国浄地は「大倭日高見之国」と呼ばれるので「四方之国」を外廓として^{スナ}緯の在るかぎり」と「下津磐根」「高天原」と下の下までも上の上までも^{タテ}経としての在るかぎり」とを「美頭乃御舍」即「天之御蔭日之御蔭」としてその中心に^{コモ}隠り「^{カクリミ}隱身天之御中主神」のそのままに上天下地四維八隅一切合切を安らけく平けく統治統率せさせ給ふ。

宇宙の側の話

それは人間身として拝しまつることを得る御玉躰が高天原にての皇親神漏岐神漏美命にたましまし隱身の神としての天之御中主神にたまいますが故に近く図解を借りて説明すれば○なる球躰で⊕である。之を古聖は十字架と教へられた。「十字架上一^{無宇宙の側の存在}点之火^{ヒノカミ}」は時空を超えて時空を現はしつつ過去も如是将来も如是現在も如是経に結に際涯無き日なる光である。之を「日神」とも「⊕」とも「・—○」とも称へて来たのは人間身の機能相応に判り易からしめた神の御意である。

日神^{ヒノカミ}によつて完成された宇宙全体を表現する時は「・—○」と描く。(262頁)

やくさかみかみこそかかれか
みのことかみのまにまにかみし
らすまに。

生死は「月」の教ふるところ
なりとて日本書紀と舊事紀に於
ける「月夜見・月弓・月讀命」
の傳と「月讀命と保食神」との
神話を生じたるなり。
然り。

神話と称するものは各國にて
神傳を小説化したるものにして
其の神傳の心を正しく傳へたる
ものと然らざるものとの混淆し
て流布せられつつあるなり。

之れを思ふ。

東天西地南池北溟の理。

所謂良心無きものを北溟の幽
鬼と名づけて□□□□の如き
ものなり。

彼が如きを蛆と呼ぶ。

蛆を教ふるには水を以てす。

水を用ゐて後に火をを以てす。

水火相和して湯をなすを青垣

東山と稱へて降三世明王と真言
宗の教へたるところなり。

あちめおおお。

之れをアチメと稱し、アチメ
オオオともオオオとも稱するな
り。

而して其の水火とは八種雷に

して妖魔幽鬼の群団なり。

「蛆タカレトロロギ」と古事
記に記したる黄泉津醜女なり。

フルベユラユラトフルベ。
ヌナトモモユラ。

閉戸籠居三年有半。

柳暗花明徒匆忙。

飛燕三五西又東。

細雨濛濛堤下村。

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ
ヒメアアヒガテンジユウアイコ
ウ。

ウトノミヤシロ。

ウトノカミミヤ。

ウトノミヤ。

ウト。

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウト。ウ。

ヨシ。

國史を讀むは無上史を讀むよりも迂遠にして、外國歴史を讀むは更に更に迂遠なり。

然れども、世道人心を指導教養せんと欲せば、家庭史を讀ましめよ。郷土史を讀ましめよ。國民史を讀ましめよ。國史史を讀ましめよ。

人間歴史を讀めば人間行路は定まるるなり。

人間行路を知ること、人間の目的と生活と生死とを知ることにして、過去を知りて、將來と現在を知ることなれば、人と

しての基準を知らるるなり。

人としての基準を知れば行止進退に迷ふこと無く、惑ふこと無く、一國昭昭として八面玲瓏として、水晶球裡に坐するが如くなり。

故に名づけて白玉なり、皇土と號稱へまつれる天皇なり。

アチメオオオオとは稱するなり。

(ここに左の「之レ人間歴史ノ目次ナリ。」が入ります)

以上。

古老今人を介同

水晶球に於て

白玉は無宇宙(白玉樓)における

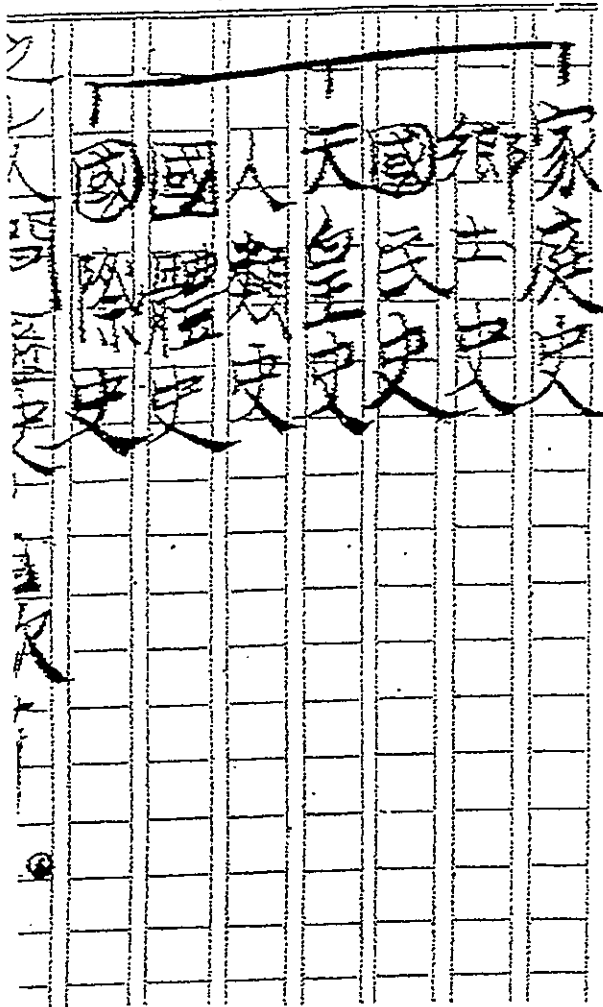
実体のこと。ここでは、ちたつ

「行止進退に迷ふこと」の無き、凡人

を指している。

こうした無宇宙を境域としては、

皇土とも、アチメオオオオとも書つ。



多田雄三先生の筆蹟

ふるさとかへるころのう
らうらとひかりみちたるたかま
とのやま。

あちめおおお。

朝夕に我が搔き鳴らす玉の緒
の琴こそ響け君を迎へて。

ああひがてんじんゆうあいこ
う。

ふるべゆらゆらとをふるべ。

ぬなとももゆら。

あちめあちめあちめあちめあ

ちめ。

うと。

うと。うと。うと。うと。うと。

アチメアチメアチメアチメア
チメ。

ヒフミヨイムナヤココノタリ
ヤモモチチミテリ。

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

八雲琴我が掻き鳴らす束の間
を人こそ學べ身をば捧げて。

八雲琴我が掻き鳴らす神の聲
神寄板に今日も昨日も。

フルコトノフミミチワケテワ
ガヒクヤカミノヲゴトノコロロ
コロロニ。

天地の神にぞ祈る我が心大空
の如くあるべく。

アチメアチメアチメアチメア
チメ。

アメツチノカミノコロヲコ
コロニテキツキナシタルアシハ
ラノクニ。

波の音遠く聞こえて入江には
人こそ集へ船出すらしも。

あさもよし城の上の宮は神な
がら神のうけひて神しらすまに

アチメ オオオ。

アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。 以上。

昭和十一年九月二十二日
大日本祓禊所 語部宮

「稱名」とは、「佛体」であり、「妙相」であり、「妙用」であり、「觀世音」という。

「稱名」を一心專念に稱れば、即時に「妙音」となり、「觀世音」となり、この身このまま「觀世音佛」なる「極樂世界」となる。

この身このまま佛の国である極樂世界であると悟る時は、この身このまま極樂淨土である。

もし、人が苦悩あると思つた時は、それは魔界にあるが、一心專念に「稱名」を稱れば、直ちに佛の国である極樂世界となるということが、これが解脱サトリであり、大死サトリであり、涅槃サトリであり、「一切の有で一切の無」で、「極大にして極小であり、極無極の人」ということになるのである。